

エゼキエル書33-35章「イスラエル回復の始まり」

1A イスラエルの見張り人 33

1B 血の責任 1-9

2B 悪からの立ち帰り 10-20

3B エルサレム陥落後 21-33

2A 新しい牧者 34

1B 自分を肥やす者たち 1-10

2B 主ご自身による養い 11-22

3B ダビデによる平和の契約 23-31

3A セイル山の荒廃 35

1B 執拗な敵意 1-9

2B 土地の占領 10-15

本文

エゼキエル書 33 章を開いてください。私たちはエゼキエル書の半ばに入り、ここからイスラエル回復のメッセージを読んでいきます。これまで裁きの言葉をずっと読んできたのであり、心がとても辛かったです。これでようやく、希望と回復だと感じます。しかし、実はメッセージは変わっていません。それは、「主への立ち帰りがあるこそその回復」だということです。主はイスラエルを回復させたいと願われています。しかし、最も大切なこと、それは彼らが自分に滅びをもたらす悪を捨てて、主のところに帰って来ることこそ、その主との交わりこそが、神が願っておられるからです。その部分を初めに、主はお語りになります。

1A イスラエルの見張り人 33

1B 血の責任 1-9

33:1 次のような主のことばが私にあった。33:2 「人の子よ。あなたの民の者たちに告げて言え。わたしが一つの国に剣を送るとき、その国の民は彼らの中からひとりを選び、自分たちの見張り人とする。33:3 剣がその国に来るのを見たなら、彼は角笛を吹き鳴らし、民に警告を与えなければならない。33:4 だれかが、角笛の音を聞いても警告を受けないなら、剣が来て、その者を打ち取るとき、その血の責任はその者の頭上に帰する。33:5 角笛の音を聞きながら、警告を受けなければ、その血の責任は彼自身に帰する。しかし、警告を受けていれば、彼は自分のいのちを救う。33:6 しかし、見張り人が、剣の来るのを見ながら角笛を吹き鳴らさず、そのため民が警告を受けないとき、剣が来て、彼らの中のひとりを取り取れば、その者は自分の咎のために打ち取られ、わたしはその血の責任を見張り人に問う。

主は、見張り人の務めについて、その責任を明確にしておられます。見張り人の務めは、警告を与えることです。敵が攻めてきた時に、角笛を吹き鳴らして警告を与えなければいけない。もし、その警告を聞かなければ、そこにいる人々は剣で打ち殺されますが、見張り人に非はありません。けれども、角笛を吹き鳴らさなければ、人々が殺されることについて、見張り人にその血の責任を問われます。

33:7 人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くとき、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。33:8 わたしが悪者に、『悪者よ。あなたは必ず死ぬ。』と言うとき、もし、あなたがその悪者にその道から離れるように語って警告しないなら、その悪者は自分の咎のために死ぬ。そしてわたしは彼の血の責任をあなたに問う。33:9 あなたが、悪者にその道から立ち返るよう警告しても、彼がその道から立ち返らないなら、彼は自分の咎のために死ななければならない。しかし、あなたは自分のいのちを救うことになる。

主は、イスラエルが回復させるメッセージをエゼキエルに託すにあたって、かつて神がエルサレムへの裁きを彼にゆだねるときと同じ命令を与えておられます。これから、まだ悪を行なっている者たちに対して、主に立ち上がりなさいという言葉を読まなければいけません。それを躊躇してしまう二つの理由があるでしょう。一つは、反対や迫害を受けるかもしれない。もう一つは、「どうせ語っても、受け入れてくれないだろう。」というものです。二つ目の理由に、主は焦点を当てておられます。人が預言をする時に陥ってしまう過ちは、相手がどう反応するか？ということにあります。そして、預言を語るということは、聞き入れないで滅んでしまう人々を目の当たりに見ていくことにも他なりません。その生々しい現実を見るに堪えないので、自分は口を閉ざしておこうという思いがやって来ます。

しかし主は、ゆえに預言をするということは「見張り人なのだ」ということを、その自己認識をはっきりさせるように念を押しておられるのです。見張り人は、その警告をすること自体に責任がありません。つまり、聞く人々の反応に対して責任がありません。そしてもう一つ、もし警告をしなければ、全ての人が悔い改める機会を失い、滅びます。しかし警告を与えれば、聞き入れないで滅びる人がいるけれども、立ち返って生きる人々もいるのだ、ということです。ゼロなのか、それもいくらかなのか？という選択です。ここが踏ん張りどころです。例えるならば緊急医療チームにも似ているかもしれません。その医療従事者の方々は、最善を尽くしても救命できない人々を目の当たりにしなければいけません。しかし救命しなければ、全ての人が死んでいきます。

私たちは福音宣教において、このような召命を受けているのだということを思い出す必要があります。パウロは、福音を伝えることについてこう言いました。「というのは、私が福音を宣べ伝えるも、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならぬことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわざに会います。(1コリント 9:16)」エゼキエルに対

して、「血の責任をあなたに問う」と言われたのは、パウロは「災い」という言葉で表現しています。このような切迫を、伝道において、証しにおいて持つておられるでしょうか？

2B 悪からの立ち帰り 10-20

33:10 人の子よ。イスラエルの人に言え。あなたがたはこう言っている。『私たちのそむきと罪は私たちの上にのしかかり、そのため、私たちは朽ち果てた。私たちはどうして生きられよう。』と。

33:11 彼らにこう言え。『わたしは誓って言う。…神である主の御告げ。…わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの人よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。』

主はこのことについて、既に18章で教えておられました。けれども、少しニュアンスが違います。ここでは、先祖や本人たちの罪によって、バビロンに捕え移されてしまい、もう自分たちには生きて行く望みはないと、絶望してしまっている人々に対する励ましなのです。自分たちがこれだけの罪を犯したのなら、赦されるはずはないという恐れを、私たちは抱きます。そして、私たちがこれだけの罪を犯しているのだから、その力は強く、立ち返ることはできないという、あきらめがあります。前者は罪の結果、後者は罪の力について絶望しているのです。けれども、主は、「悔い改めることはできる。立ち返ることができる。あなたには、罪を全て赦す神の力に、上から覆われるのだ。」と励まされるのです。

33:12 人の子よ。あなたの民の者たちに言え。正しい人の正しさも、彼がそむきの罪を犯したら、それは彼を救うことはできない。悪者の悪も、彼がその悪から立ち返るとき、その悪は彼を倒すことはできない。正しい人でも、罪を犯すとき、彼は自分の正しさによって生きることができない。

33:13 わたしが正しい人に、『あなたは必ず生きる。』と言っても、もし彼が自分の正しさに拠り頼み、不正をするなら、彼の正しい行ないは何一つ覚えられず、彼は自分の行なった不正によって死ななければならない。33:14 わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ。』と言っても、もし彼が自分の罪を悔い改め、公義と正義とを行ない、33:15 その悪者が質物を返し、かすめた物を償い、不正をせず、いのちのおきてに従って歩むなら、彼は必ず生き、死ぬことはない。33:16 彼が犯した罪は何一つ覚えられず、公義と正義とを行なった彼は必ず生きる。

これまでどんなに酷い悪を犯した人であっても、悔い改めればその全てを神は赦してくださいませ。ヨハネ第一には私たちが罪を言い表したら、神は、「すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(9節)」とあります。もう、罪の責めで苦しまなくても良いのです、これが福音です。その反対に、自分の正義を神の前で積み上げることができないのも、真実なのです。これまでどんなに正しいことを行なっても、一つ罪によって神から引き離すのに十分です。私たちが正しいと思って行なっていることが、実はそこには不純だらけで、高ぶりやねたみや諸々の悪がその深いところに潜んでいます。正しい行いは神の前では不潔な着物であると、イザヤ書に書かれています。神殿

で自分の義を神の前で祈っているパリサイ人のことを思い出してください。神殿の中に入ることもできず、憐れんでくださいと祈った取税人の方が義と認められました(ルカ 18:9-14)。

33:17 あなたの民の者たちは、『主の態度は公正でない。』と言っている。しかし、彼らの態度こそ公正でない。33:18 正しい人でも、自分の正しい行ないから遠ざかり、不正をするなら、彼はそのために死ぬ。33:19 悪者でも、自分の悪から遠ざかり、公義と正義とを行なうなら、そのために彼は生きる。33:20 それでもあなたがたは、『主の態度は公正でない。』と言う。イスラエルの家よ。わたしはあなたがたをそれぞれの態度にしたがってさばく。」

これまで誠実に生きてきた人が、悔い改めなかったので地獄に行き、これまで悪を繰り返して生きていたものが、悔い改めたので天国に行く、というのが、神の福音です。これを、「主の態度は公正でない。」と非難する思いが私たちに出てきます。しかし、それこそ正しくない態度です。私たちは、他人の行なった罪については赦すべきではないと非難します。そして、自分の罪についてはなかなか悔い改めず、「私はこれだけ正しいのだ」と自己の正しさを主張します。そして、悔い改め、すべての罪を赦す神の慈悲深さを公正ではないと非難するのです。その自分の罪を認めない態度こそが、神の裁きの対象となります。

どれだけ正しいことをしたのか？という考えは、実に自己中心的です。神の関心事は、私たちがどれだけ良いことをしたのか？ではなく、神のところに近づき、この方により頼み、交わり、その命令にも従順になり、一つとなっていることこそが願われていることです。その親しい交わりを持つために罪を悔い改めなさいと言われていたのであって、人が自分の義を誇るために悔い改めるのはありません。

3B エルサレム陥落後 21-33

33:21 私たちが捕囚となって十二年目の第十の月の五日、エルサレムからのがれた者が、私のもとに来て、「町は占領された。」と言った。33:22 そののがれた者が来る前の夕方、主の御手が私の上であり、朝になって彼が私のもとに来る前に、私の口は開かれた。こうして、私の口は開かれ、もう私は黙っていなかった。

時は紀元前 585 年 1 月 9 日のことです。神殿が滅んだのが 586 年 8 月 17 日ですから、それから 4 ヶ月半の期間が経っています。これは、エルサレムからエゼキエルたちが住んでいる、バビロンのケバルまで一つの知らせを伝えるにもそれだけの期間がかかるからです。

そしてエゼキエルの「口は開かれた。」とあります。覚えていますか、彼はエルサレムに対する預言をすべて語り終えた時、主がエルサレムに対する彼の口を閉ざされました。24 章の最後に書いてあります。ここから彼は、エルサレムに対する裁きではなく、エルサレム、そしてイスラエル全体

を神が回復してくださる預言を告げ知らせるのです。そして、エゼキエルは、その逃れて来た人が実際に陥落を知らせる前に、既に口を開いていることです。これを新約聖書では「知識の言葉」と言いますが、御霊の賜物の一つで、超自然的な方法である知識が与えられることを言います(1コリント 12:8)。彼が伝える情報は、エゼキエルにとっては確認となりました。

33:23 次のような主のことばが私にあった。33:24 「人の子よ。イスラエルの地のこの廃墟に住む者たちは、『アブラハムはひとりでこの地を所有していた。私たちは多いのに、この地を所有するように与えられている。』と言っている。33:25 それゆえ、彼らに言え。神である主はこう仰せられる。あなたがたは血がついたままで食べ、自分たちの偶像を仰ぎ見、血を流しているのに、この地を所有しようとするのか。33:26 あなたがたは自分の剣に投げ頼み、忌みきらうべきことをし、おのおの隣人の妻を汚しているながら、この地を所有しようとするのか。33:27 あなたは彼らにこう言え。神である主はこう仰せられる。わたしは誓って言うが、あの廃墟にいる者は必ず剣に倒れる。野にいる者も、わたしは獣に与えてそのえじきとする。要害とほら穴にいる者は疫病で死ぬ。33:28 わたしはその地を荒れ果てさせ、荒廃した地とする。その力強い誇りは消えうせ、イスラエルの山々は荒れ果て、だれもそこを通らなくなる。33:29 このとき、わたしが、彼らの行なったすべての忌みきらうべきわざのためにその国を荒れ果てさせ、荒廃した地とすると、彼らは、わたしが主であることを知ろう。

これは、エルサレムが破壊された後に、生き残っているわずかなユダヤ人たちに対する預言です。ユダヤ人の中には、どうして脱却できない思いがありました。それは、「エルサレムに留まっている者たちこそが、義の中にいる。」というものです。アブラハムへの約束の地は自分たちのものだ、多くがいなくなったので、全てを自分たちのものにできると考えました。そして捕え移された者たちは、敗北者であり、罪の中にいる、という考えです。しかし、主はその反対を語っておられますね。バビロンに捕え移されるのは御心であり、その中で主を尋ね求めるならば、主は見いだされ、それで七十年後にエルサレムに帰還できるようになる、そうした幸いな計画を立てていることをエレミヤ書 29 章 10-14 節で預言されていました。

主が願っておられるのは、悪い行ないからの悔い改めであります。主に立ち返ることあります。そのために彼らをバビロンに捕え移すなら、それを行なうと言われます。それでもし悔い改めるなら、その人々は全てを得たと言っても過言ではないでしょう。主ご自身が彼らの財産になります。しかし悔い改めないのであれば、今持っているものも、取り上げられるのです。彼らの今いる土地は廃墟となり、彼ら自身も滅んでしまいます。私たちの人生で敗北であると感じることがあるでしょう、今まで大切にしていたものが取り上げられる時に、しかしその時こそ全てを得たという経験を、悔い改めと主への信仰によって得ることができるのです。

33:30 人の子よ。あなたの民の者たちは城壁のそばや、家々の入口で、あなたについて互いに

語り合っとう言っている。『さあ、どんなことばが主から出るか聞きに行こう。』33:31 彼らは群れをなしてあなたのもとに来、わたしの民はあなたの前にすわり、あなたのことばを聞く。しかし、それを実行しようとはしない。彼らは、口では恋をする者であるが、彼らの心は利得を追っている。33:32 あなたは彼らにとっては、音楽に合わせて美しく歌われる恋の歌のようだ。彼らはあなたのことばを聞くが、それを実行しようとはしない。33:33 しかし、あのことは起こり、もう来ている。彼らは、自分たちの間にひとりの預言者がいたことを知ろう。」

これは、バビロンのケバルのユダヤ人たちに対する預言です。これまでエゼキエルが、神の預言を身振り手振りで、実演をもって彼らに伝えましたが、それが実際にその通りになりました。そして久しぶりに口を開いて語っています。それで彼らが、「次に何をエゼキエルが語るか、聞いてみよう。」と言っています。好奇心をもって聞いていますが、実際に自分を捨てて、神に聞き従う生活を選ぶではありません。ヤコブは、「1:22 また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。」と言いました。聞いているだけで行なっていないなら、それは本当の信仰ではありません。信じていると自分を欺いているのですが、実は信じていないのです。ですから聞いていない人と同じように、神の裁きを受けます。

2A 新しい牧者 34

1B 自分を肥やす者たち 1-10

34:1 次のような主のことばが私にあった。34:2 「人の子よ。イスラエルの牧者たちに向かって預言せよ。預言して、彼ら、牧者たちに言え。神である主はこう仰せられる。ああ、自分を肥やしているイスラエルの牧者たち。牧者は羊を養わなければならないのではないか。34:3 あなたがたは脂肪を食べ、羊の毛を身にまとい、肥えた羊をほふるが、羊を養わない。34:4 弱った羊を強めず、病気のものをいやさず、傷ついたものを包まず、迷い出たものを連れ戻さず、失われたものを捜さず、かえって力づくで暴力で彼らを支配した。34:5 彼らは牧者がいないので、散らされ、あらゆる野の獣のえじきとなり、散らされてしまった。34:6 わたしの羊はすべての山々やすべての高い丘をさまよひ、わたしの羊は地の全面に散らされた。尋ねる者もなく、捜す者もない。34:7 それゆえ、牧者たちよ、主のことばを聞け。34:8 わたしは生きている、..神である主の御告げ。..わたしの羊はかすめ奪われ、牧者がいないため、あらゆる野の獣のえじきとなっている。それなのに、わたしの牧者たちは、わたしの羊を捜し求めず、かえって牧者たちは自分自身を養い、わたしの羊を養わない。34:9 それゆえ、牧者たちよ、主のことばを聞け。34:10 神である主はこう仰せられる。わたしは牧者たちに立ち向かい、彼らの手からわたしの羊を取り返し、彼らに羊を飼うのをやめさせる。牧者たちは二度と自分自身を養えなくなる。わたしは彼らの口からわたしの羊を救い出し、彼らのえじきにさせない。

午前中にお話しさせていただいた内容です。主はエゼキエルに対して、まず「牧者の回復」から語り始めてくださいます。牧者とは、すなわち国の指導者のことです。ゼカリヤ書 11 章には、宗教

指導者としての牧者の姿が出てきます。そこには、ローマ時代のユダヤ教の指導者らと、メシヤとの確執が描かれており、あの有名な、銀 30 シェケルで売られて、それを陶器師に投げ与えるという、イエス様の預言が書かれています。それから、羊が散らされて、次に愚かな牧者が出てきます。反キリストの預言です。しかし主が力をもって戻って来られる再臨の預言が 12 章に続きます。このように、指導者が立てられなければ、羊たち、すなわち一般の民は立ち上がることさえできず、散らされ、傷を受け、死に絶えてしまうだけであります。国においても、教会においても、ゆえに指導者のために祈り、執り成すことが、いかに大切かが分かります。イスラエルの民に対しては、彼らが帰還して、そこに住むにあたって、ダビデと同じようなメシヤを牧者として与え、それでイスラエルの回復を行なうことを約束しておられます。

ここで目に留めたいのは、主が民のことを「わたしの羊」としておられることです。牧者と指導者たちのことを呼ばれていますが、まことの牧者は主ご自身であります。それを忘れて、自分自身の者であるかのように羊を屠り、その肉を食べ、その羊毛を着物にしていき、弱った羊を強めることをしなかったのです。これは、教会の牧者に対する警告でもあります。そして主は、ご自分の羊を守るために彼らから引き離されます。それが起こったのが、福音書の出来事です。

2B 主ご自身による養い 11-22

34:11 まことに、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは自分でわたしの羊を捜し出し、これの世話をする。34:12 牧者が昼間、散らされていた自分の羊の中において、その群れの世話をするように、わたしはわたしの羊を、雲と暗やみの日に散らされたすべての所から救い出して、世話をする。34:13 わたしは国々の民の中から彼らを連れ出し、国々から彼らを集め、彼らを彼らの地に連れて行き、イスラエルの山々や谷川のほとり、またその国のうちの人の住むすべての所で彼らを養う。34:14 わたしは良い牧場で彼らを養い、イスラエルの高い山々が彼らのおりとなる。彼らはその良いおりに伏し、イスラエルの山々の肥えた牧場で草をはむ。34:15 わたしがわたしの羊を飼い、わたしが彼らをいこわせる。…神である主の御告げ。…34:16 わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病気のものを力づける。わたしは、肥えたものと強いものを滅ぼす。わたしは正しいさばきをもって彼らを養う。

イエス様ご自身が、この預言の成就そのものであります。政治的指導者も宗教指導者にも、ユダヤの民を支配させることを許さず、ご自身が牧者となってくださいました。福音書の中に何度となく、イスラエルの滅んだ羊のために来るといふこと、失われた者を捜すために来られたといふこと、そして一匹の迷った羊のために九十九匹を残して捜すといふこと、その心がここに書かれています。「雲と暗やみの日に散らされた」とありますが、これは罪が増し加わったことによって天においても暗闇になったといふことです。イエス様は、十字架に付けられた時に天が暗くなりました。そしてその 40 年後、ローマによって世界に離散しました。しかし、その十字架の御業によって、ユダヤ人の一部が救われ、異邦人の多くが救われています。「ヨハネ 11:52 *ただ国民のためだけでなく、散ら*

されている神の子たちを集めるためにも死のうとしておられる」とあります。

しかし、霊的に主のもとに集められるだけではありません、物理的にもアブラハムに約束されたことを回復してください。すなわち、イスラエルの地に戻り、そこ全体が牧場であるかのごとく、豊かな土地に戻していただき、そこに安心して民が住むことができるようにしてください。これは再臨の時に成就しますが、その一部を私たちは今のイスラエルの国で見ることができるのです。

34:17 わたしの群れよ。あなたがたについて、神である主はこう仰せられる。見よ。わたしは、羊と羊、雄羊と雄やぎとの間をさばく。34:18 あなたがたは、良い牧場で草を食べて、それで足りないのか。その牧場の残った分を足で踏みにじり、澄んだ水を飲んで、その残りを足で濁すとは。34:19 わたしの群れは、あなたがたの足が踏みつけた草を食べ、あなたがたの足が濁した水を飲んでいる。34:20 それゆえ、神である主は彼らにこう仰せられる。見よ。わたし自身、肥えた羊とやせた羊との間をさばく。34:21 あなたがたがわき腹と肩で押しつけ、その角ですべての弱いものを突き倒し、ついに彼らを外に追い散らしてしまったので、34:22 わたしはわたしの群れを救い、彼らが二度とえじきとにならないようにし、羊と羊との間をさばく。

ここでは、牧者つまり指導者の問題ではなく、羊、すなわち一般のイスラエル人の中で起こっていた問題であります。羊と羊の間を主が裁かれますが、それは自分でその牧場を独り占めして、虐げる者たちがいるからです。これは具体的には経済的な格差のことでありましょう。富んだユダヤ人が貧しいユダヤ人を顧みない姿、虐げる姿を表しています。ネヘミヤ記を読みますと、ネヘミヤが気づかぬうちに、ユダヤ人がユダヤ人を奴隷とし、また異邦人に同胞の民を売るという奴隷売買を行なっていることが発覚しました。それで強い憤りを抱き、悔い改めへと導き、売られてしまった者たちを買い戻すようにさせています(5章)。

私たちは前回、私たち一人一人が、松葉杖が必要であることを学びました。弱い人を主にあって支えるのが教会であることを学びました。しかし、互いに自分を求めていけば、弱まっている人を顧みることがなく一つ心になれない問題があります。いたわり合うのではなく、確執や争いが起こります。パウロは、強い人に次のように勧めました。「ローマ 15:1-2 私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。」他者の益となるようにします。

羊と山羊の選り分けについて、再臨された主の前で国々が集められることが、マタイ 25 章 31 節以降にありますね。これはユダヤ人の間ではなく、全ての国々の間でのことですが、神の国を相続するに当たって、「あなたがたが、これらわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。(マタイ 25:40)」と言われました。神の国に入るときに、自分の益を求めている者たちは退けられます。キリストの体において機能していること、支え合い、助け

合うことは、御国においてもその通りなのです。

3B ダビデによる平和の契約 23-31

34:23 わたしは、彼らを牧するひとりの牧者、わたしのしのベダビデを起こす。彼は彼らを養い、彼らの牧者となる。34:24 主であるわたしが彼らの神となり、わたしのしもベダビデはあなたがたの間で君主となる。主であるわたしがこう告げる。

ダビデの子、キリストの預言です。この方が王となることによって、イスラエルの民が神を神とすることが真実の意味でできるようになります。ダビデ本人は良い牧者であり、キリストを指し示す人でした。詩篇 78 篇に「主はまた、しもベダビデを選び、羊のおりから彼を召し、乳を飲ませる雌羊の番から彼を連れて来て、御民ヤコブとご自分のものであるイスラエルを牧するようになされた。(70-71 節)」とあります。彼は、少年の頃、羊飼いをしていたので、どのように弱っている人を助け、痛んでいる人を直し、また狼から守るべきなのかを知っていました。同じ心で彼は、王となってからも人々に仕える者となったのです。

34:25 わたしは彼らと平和の契約を結び、悪い獣をこの国から取り除く。彼らは安心して荒野に住み、森の中で眠る。34:26 わたしは彼らと、わたしの丘の回りとに祝福を与え、季節にかなって雨を降らせる。それは祝福の雨となる。34:27 野の木は実をみのらせ、地は産物を生じ、彼らは安心して自分たちの土地にいるようになる。わたしが彼らのくびきの横木を打ち砕き、彼らを奴隷にした者たちの手から救い出すとき、彼らは、わたしが主であることを知ろう。34:28 彼らは二度と諸国の民のえじきとならず、この国の獣も彼らを食い殺さない。彼らは安心して住み、もう彼らを脅かす者もない。34:29 わたしは、彼らのためにりっぱな植物を生やす。彼らは、二度とその国でききんに会うこともなく、二度と諸国の民の侮辱を受けることもない。

「平和の契約」とあります。これは、新しい契約のことです。これまで指導者によって虐げがあり、また民の間でも強い者が弱い者を虐げる、そのような葛藤がありますが、それを主は取り除かれます。それから、土地にも平和と繁栄を与えられます。獣の危険も取り除かれます。それから、外敵からも守られて、安心して過ごすことができます。新しく御霊によって生まれることが新しい契約の内容として、エレミヤ書とエゼキエル書に書かれていますが、このように、新しい契約はそれだけに終わりません。

34:30 このとき、彼らは、わたしが主で、彼らとともにいる彼らの神であり、彼らイスラエルの家がわたしの民であることを知ろう。..神である主の御告げ。..34:31 あなたがたはわたしの羊、わたしの牧場の羊である。あなたがたは人で、わたしはあなたがたの神である。..神である主の御告げ。..」

これは、新しい契約による霊的な回復の約束です。ここで主が強調されているのは、彼らは羊なのだよ、人なのだよ、ということです。これを忘れてしまうから、独立できるのだ、自分でやっていけるのだと思い込んでしまいます。私たちが単なる、はかない肉の者であり、羊であり、羊飼いが必ず必要なのだということを知る必要があります。自分が弱いのだということを知るのです。

3A セイル山の荒廃 35

そして次、35 章ですが、ここは「セイルの山」に向けた預言です。セイルは死海の南の地域であり、エドムのことです。なぜここに、エドムへの預言があるのでしょうか？イスラエルの回復がこれから明らかにされていく時に、なぜエドムがここにあるのか。それは、36 章にイスラエルの山々に対する預言があるからです。今はイスラエルの山が荒れ果て、セイルが喜んでいるが、今度はセイルが荒れ果て、そしてイスラエルの山々に木々が植えられるという対比があるからです。

1B 執拗な敵意 1-9

35:1 次のような主のことが私にあった。35:2 「人の子よ。顔をセイルの山に向け、これについて預言して、35:3 言え。神である主はこう仰せられる。セイルの山よ。わたしはおまえに立ち向かい、おまえにわたしは手を伸ばし、おまえを荒れ果てさせ、荒廃した地とする。35:4 わたしがおまえの町々を廃墟にし、おまえを荒れ果てさせるとき、おまえは、わたしが主であることを知ろう。35:5 おまえはいつまでも敵意を抱き、イスラエル人が災難に会うとき、彼らの最後の刑罰の時、彼らを剣に渡した。35:6 それゆえ、..わたしは生きている。神である主の御告げ。..わたしは必ずおまえを血に渡す。血はおまえを追う。おまえは血を憎んだが、血はおまえを追いかける。35:7 わたしはセイルの山を荒れ果てさせ、廃墟とし、そこを行き来する者を断ち滅ぼす。35:8 わたしはその山々を死体で満たし、剣で刺し殺された者たちがおまえの丘や谷や、すべての谷川に倒れる。35:9 わたしはおまえを永遠に荒れ果てさせる。おまえの町々は回復しない。おまえたちは、わたしが主であることを知ろう。

エドムに対する預言は、エレミヤ書においても詳しく預言されており、そしてエドムだけに絞って預言しているオバデヤ書があります。その全てが、永遠の荒廃と廃墟を預言しています。エドムは、エルサレムがバビロンによって破壊されるときに、その虐殺と略奪をエドム人は手助けしました。しかし、バビロンによって攻められます。またメディア・ペルシヤからも攻められ、そして彼らはユダヤ地方に動きましたが、イドマヤ人と呼ばれます。マカバイ家のヨハネ・ヒュルカノスによって、紀元前 162 年に強制的にユダヤ教に改宗させられました。そして、そのエドムのセイルは、ナバテヤ人がやってきて移り住み、歴史の中から姿を消していきました。そして、将来においても荒廃した地になります。終わりの日に、ユダヤ人の人たちが、荒らす憎むべき者が聖所に入るのを見て、この地域に逃げます。そして、ユダヤ人を滅ぼすべく反キリストを先頭とする軍隊がやって来ます。けれども、ボツラに主が来られることをイザヤは預言しています。そしてこれらの敵と戦い、イエス様の衣には返り血によって真っ赤になっていることを伝えています(63:1-6)。

興味深いことに、6 節の「血」というのは「ダム」とヘブル語で言いますが、エドムという言葉は「赤い」という「アドム」から来ており、掛詞になっているのです。エドムが流血の罪を犯したら、その血「ダム」はお前に帰ってくるぞということです。

主が問題にされているのは、以前も学びましたが「いつまでも敵意を抱く」ということです。主がユダを怒られて、それを滅ぼされたのですが、その裁きは神のものであります。そこに彼らは加担してはならなかったのです。復讐は主のするものであり、自分たちの手に入れてはいけません。もし入れるとどうなるのか、イエス様が、「さばいてはいけません。さばかれないためです。」と言われたように、同じ量りによって裁かれるのです。私たちには、赦し、憐れみを神は分かち合うように命じられています。裁きは主のものであり、それを自分たちの手に入れると言うことは、神のものに触れるということです。

2B 土地の占領 10-15

35:10 おまえは、『これら二つの民、二つの国は、われわれのものだ。われわれはそれを占領しよう。』と言ったが、そこに主がおられた。35:11 それゆえ、..わたしは生きている。神である主の御告げ。..おまえが彼らを憎んだのと同じほどの怒りとねたみで、わたしはおまえを必ず罰し、わたしがおまえをさばくとき、わたし自身を現わそう。35:12 おまえはイスラエルの山々に向かって、『これは荒れ果てて、われわれのえじきとなる。』と言って、侮辱したが、主であるわたしがこれをみな聞いたことを、おまえは知るようになる。35:13 おまえたちは、わたしに向かって高慢なことを吐いたが、わたしはそれを聞いている。35:14 神である主はこう仰せられる。わたしはおまえを荒れ果てさせて、全土を喜ばせよう。35:15 おまえは、イスラエルの家の相続地が荒れ果てたのを喜んだが、わたしはおまえに同じようにしよう。セイルの山よ。おまえは荒れ果て、エドム全体もそうなる。人々は、わたしが主であることを知ろう。

「二つの民、二つの国」とは、北イスラエルと南ユダのことです。エドム本人たちは、自分たちは被害者だ、だから憎むのは当然だ、という考えです。しかし、そう言いながら彼らはユダヤ人を見下し、イスラエルの土地を侮辱しています。これは「高慢」であると主は断じておられます。そうです、赦さない心、憎しむ心というのは、へりくだりとは裏腹の高慢な心です。主の前に、さばきを任せることがへりくだりです。主は、平和を赦しによってもたらそうとしておられるのに、それを憎しみや怒りによって妨げています。神に対して高ぶっているのです。

そしてここから、土地そのものに対する主の思いがあります。主が彼らに与えられた土地は、彼らの所有ではなく、主ご自身のものであることを、「地はわたしのものである(レビ 25:23)」とされています。キリスト者を迫害することが、イエス様は「わたしを迫害している」とサウロに言われましたが、同じようにイスラエルの地を踏みにじっていることは、主ご自身を踏みにじっていることです。私たちがいかに、主のものを主のものとして明け渡すべきなのかがわかります。憎しみにし

ろ、貪りにしろ、「わたしが主なのだ」ということを認め、へりくだる、沈黙することが必要です。